

会をいたしました。

(この項終り)

(什記)

古田豪作は時ハ藩侯高翰より学資を給され、中島子玉(益多)と共に咸宜園に留學した。子玉についてはいふに依えられては、豪作については資料その外ほとんどわからなかつた。たまたまた大久保先生から格別のご寄稿をもつて教えられることにありがた。

なお豪作の父七左衛門は、友朋するところでは佐伯市本所の古田齒科医院(当主竹脚夫)の祖先、墓は久成寺にあるという。稱と得て古田家を訪い、また古田豪作のお墓を久成寺境内墓地にさがしたい。

(月紫)

探訪記

飯肥城址

史談会二〇周年記念行事の一つとして、去る四月十五日バスで霧島から鹿児島を登り、檜島に一泊、十六日、日南海岸へ――

九州の小京都とよばれる飯肥は、日南市の中核都市、伊東氏七百年の歴史をもつ城下町である。

昔、尋常小学校教本に「飯どころ」と題する韻文があり、「いかり」ところは孝行の、曾我兄弟で知られたりとか出ていたが、その曾我兄弟に殺された工藤祐経を始祖とし、伊豆の伊東から転封、伊東祐時を初代とし、鎌倉―南北朝―室町―江戸と、連綿三三三代七四五年に亘る治政の歴史をもつている。曾我兄弟はこの伊東氏

であるから、いかりとこ(鹿木風)が定紋である。

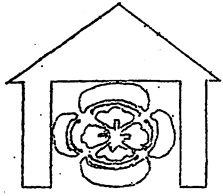
バスは、大手門ま近いとまった。見ると

パンフレットにある大手門をこわして、

樽門構えの旧大手門に復元改築中である。

門をくぐれば厳重な石垣が高くせまり、

城内宏潤、本丸跡には広場があり、学校



(いかりとこ)

也公共施設も次々と設けられている。しかし旧城址として日南市がその愛護整備に力を入れていることは、大手門の復元改築でうかがえる。うしろのことである。

今、パンフレットを要約すれば、伊東家と飯肥藩の歴史は、大凡そ次の通りである。

・鎌倉時代建久元年、工藤祐経が日向の地頭職(目司)となす。

・六代目伊東祐時、足利尊氏より都筑郡三〇〇町を賜る。

・十代祐徳、武勇すべし土持を北に追ひ、島津と飯肥を争う。

・天正五年家臣の叛乱あり、島津に追われ、一時大友氏に降す。

・天正一〇年(一六一三)伊東満所遣使節としてローマにわたる。

・天正一五年十八代伊東祐兵、秀吉の九州征伐に従って功多。

・飯肥・曾井・清武の諸城を賜ある。飯肥藩初まる。

・その後江戸時代、歴代藩主、産業を興し、藩政を勤め、民生に力を注ぎ、治績大いにあがる。

・江戸時代野中金右衛門植林に励み、植林奉行五十年間に、飯肥とさげは、すぶオビスギで佐伯地方でも植栽して

いる。成長が早く持質が強く、屈曲に耐えるので斧甲(ノコギリ)として評判が高い。さすが本場だけあって、目の届く限り山々、伸びのよい美林である。

・残念なことにはバスの時間制限され、伊東家累世の墓大迫寺の石塔、小村孝太郎銅像などめぐれなかつた。再造の機会にゆずらう。

なお、三箇峠に記念碑のある、西南の役戦死者、山田宗賢以下十数名の薩軍兵士は、まご飯肥藩の士族である

ことを付け加えておく。

(旅行参加者へおことわり)探訪がすんでバスに乗る前、一部のものが手に入れたパンフレットは、足りない分をすずか諸君へ送らせてあげ、昼食の際記録した入手者のメモがどうしても見つからないので、送れないで困っている。希望者は電報でどうぞ。(開)